

不易と流行パート2 ～挨拶について考えてみました～



紫陽花の花が雨に映える季節となりました。

昨年2度延期になった修学旅行も、今年は18日、19日に無事行ってきました。

さて、今月の全校集会では、学校だけでなく社会に出てからも大切な「挨拶」について話をしました。6月現在、大野っ子たちの朝の「挨拶」の状況を点数で表すと、およそ70点です。

学校教育における不易なもの1つである「挨拶」の2つの漢字をそれぞれ訓読みにすると、「挨」は「押す、ひらく」と読み、「拶」は「せまる、近づく」と読みます。このことから、人に「挨拶」をするということは、自分の心の扉を開けて、その人の心に近づくという意味があるのです。挨拶は人と人とを結びつける基本であり、お互いの心を開く第一歩にもなるのです。

ところで、日本では、人に挨拶するときには、「お辞儀」をします。昔から本人がお辞儀をする場合、お辞儀した状態では鞘（さや）から刀を抜けませんから、自分は危害を加えませんということを表していたそうです。世界には、いろいろな挨拶の仕方があります。例えば、アメリカではどうでしょうか？ 手と手を握り合う、「握手」や、軽く抱き合う「ハグ」をします。アメリカ人が握手をするのは、手に銃を持っていませんよという意味を示しています。また、インドやネパールでは、両手を胸の前で合わせて「ナマステ」と言います。ニュージーランドの先住民のマオリ族の人たちは、鼻と鼻を左右にこすりあわせて挨拶をします。チベットという地域では、舌をペロッと出すことで挨拶をします。私たちには、何か奇妙な感じがしますが、世界には色々な挨拶があります。どの挨拶もすべて、「私は、あなたの敵ではありませんよ。仲良くしましょうね」ということを相手に示すためのものです。

子どもたちの「おはようございます！」という元気なあいさつは、とても気持ちがいいものです。でも、あいさつはいつも大きな声を出さなければいけないというわけではありません。例えば、学校の廊下で先生やお客さんに出会ったとき、「こんにちは」と元気よくあいさつするのもいいですが、少し立ち止まって静かにお辞儀をするのもいいです。これを会釈と言います。高学年くらいになってさり気なくできるといいと思います。あいさつは心から心へ伝えるもの。時と場に応じて適切なあいさつができることが大切です。



大野小学校では、これからも子どもたちに挨拶の大切さを伝え続け、当面は80点を目標にがんばります。

- 有名なお話 -

元サッカー日本代表監督の長沼健さんは、「サッカーが上手になるためには、2つのものが重要だ」と言いました。それは、「挨拶」と「整理整頓」なのだそうです。長沼さんのこの話を聞いた後、「挨拶や整理整頓ができなくても、サッカーが上手になる人はいるんじゃないですか？」と聞いた人がいました。これに対して、長沼さんは次のように答えたそうです。

「いません。絶対にいません。何千人という選手を育ててきましたが、サッカーが上手になる人は、必ず自分から「挨拶」ができ、「整理整頓」がきちんとできるのです。なぜだか理由は分かりませんが…。」

実は、長沼さんの話を聞いて、「私たちの世界でも同じです。」と言った人がいました。それは、プロ野球の巨人というチームを9年連続日本一にした川上監督です。また、進学校で有名な日比谷高校の先生も同様だと言いました。

サッカーでも野球でも勉強でも、うまくなる、できるようになるには、「挨拶」と「整理整頓」が大切なんですね。